

死の起源説明神話

福 島 秋 穂

未だ文明の恩恵に浴することのない、未開野蛮の状態にある人々にとって、此の世に生を受けたもの（特に自分たち人間）が、其の成長の過程や老年期の終末時に、外的な原因或は内的な自然衰弱の故に死を迎え、二度と再び其れ以前と同様の活動をするこゝとがないということは、其の現象が一部の限られたものだけに起こることではなく、貧富貴賤老若男女の別を問わず一様に起こるものであるため、一個の大きな疑問であつた——一部の地域では、蟹・蛇等の脱皮する動物の存在が、人間の死に一層の疑惑を抱かせたに違いない——が、彼らは其の普遍的な疑問に対する解答として、人間は何故皆等しく死ななければならぬかを説明する話、即ち死の起源説明神話を創り出したのであつた。

死は、人間が何処の土地に住んでも其の人間と共にあり、其の逃れることの出来ない死の起こりを考えるという問題は、未開社会に生活する人々が無知蒙昧の域を脱し、些かの思考力を持ち得た段階で既に、人間が何故此の世に存在するようになったのかという問題と共に、彼らを待ち受けていたのである。従つて人間は、自分たちの眼前で絶えず起こっている死について思考するよ

うになると、其の現象を合理的に説明しようと努力したのであるが、固より其処に科学的知識があるわけではないので、彼らとしては其れを一個の説話として纏め上げる以外に解明の方法がなかつたのである。

死の起源説明神話は、其の現象が地域的に普遍なものであるため、凡そ人間の存在する所では、世界の如何なる場所においても見られ、しかも時間的にも普遍的な現象を対象としているため、其の創作後、孰れの民族・時代・地域を問わず伝承され、今日に及んでいるのである。

本論では、此の人間の死が何故始まつたのかを説明する神話を、世界的な広がりの中で取り上げ、其の内容面からみた特徴をもとに分類を行い、それぞれの型の分布の状態を実際の例を挙げながら考察し、併せて我国における其れは、他地域からの伝播によるものか、それとも自生したものか、また其れは如何なる形体をとつて今日まで保存伝承されてきているか、等々のことを考えてみたいと思う。

*

*

抑々、神話と称される説話の一形態は、原則的に言つて、文化

的思考力を持たぬ民衆の間、或は彼らを圍繞する自然界において起る種々の現象を基盤にして發生したものでなければならぬ。また、所謂未開民族間にあつて、或る事象を説明するための神話が創作され、しかも長期間に亘つて伝承されるためには、其の事象が民衆の眼前において繰り返し起り、決して一回性のものではなく、しかも其れを説明する神話の内容が、何時如何なる場合においても、民衆全体の承認・支持し得る体のものでなければならぬ。従つて神話は、究極的には個人の創作ではあつても、其れが数世代に亘つて語り継がれてゐる限り、最早個人の手を離れたものであり、其れを伝承する民族全体によつて創られたものであるとすることが出来るのである。また、或る事象をもとに、一個の神話が創られたとしても、其の事象が一回性のものであれば、其れを経験することのない後代の民衆間では、伝承の間に其の神話が漸次消滅の過程を辿ることは容易に察しのつくことである。

自然界における動植物の死、特に人間の死について考えると、此れほど繰り返し、しかも確実に民衆の眼前において起る事象というものは、其の全く逆の時点において起る誕生という現象を除けば、他に例を見ない。しかも人間の死は、少なくとも人間が他の動物と自らの違いを自覺して以来、何時如何なる場合においても、蔑ろに出来ぬ重大なことであったため、前にも述べた如く、死の起源を説明する神話は、世界の如何なる地域・民族においても創作され伝承され、文字の発明以後は、文献に記録されて

今日に及んでゐるのである。

今日、世界の諸民族が創作伝承した死の起源説明神話は、既に其のほとんどが採集記録されている。今、其れらの神話を読む時、私たちは、細かい点では各神話に少しずつのずれが見られ、また最終的には孰れにも属さない例外的な神話が存在するものの、其の内容の面から見て、幾つかの大きな型があることに気付くのである。

私は、非常に大雑把な捉え方ではあるが、死の起源説明神話を其の内容の面から、次の五つの型に分類してみた。

まず第一は、原初不死であつた人間が、甲乙二物質の孰れかを選択することになり、自らの意志に基いて其の一方を選んだ結果、人間界に死が始まつたとするもので、選択型と称することの出来るものである。第二は、死・生をそれぞれ代表する存在態の闘争、と言うより論争の結果、人間界に死が始まつたとする対立型であり、第三は、超自然的存在態（神）と人間の間を仲介する使者の失態により人間が死ぬようになったとする伝令型である。第四は、人間が或る種の禁制を破ることまたは罪惡をなすことによつて、死が始まつたとする処罰型、また第五は、人間が或る物質・行為を手に入れもしくは知ることと交換に永遠の生命を放棄することで、死が始まつたとする代償型である。

世界の各民族が有する死の起源説明神話は、死という現象が地域的にも時間的にも普遍に見られるものであるため、特に一地方から他地方へと物語の骨格が伝播され、それに各地方の民族が各自肉付けを行ったというものばかりではなく、或る民族が他とは

全く無関係に、独自の思考に基いて創作伝承したものも多いため、其の語るところの内容も区々であり、其処に多少の例外が存在し、其の総てを包括することは素より不可能事であるが、ほぼ前述の如き五つの型に分類することが出来る。

* * *

選択型——此の型に属する死の起源説明神話は、アフリカ大陸南東部のローデシア北部に住むウエンバ族の伝える

原初、神は一人の男と一人の女を創り、彼らに二つの包みを与えました。其の一つには生命が入っており、他の一つには死が入っていました。不幸にも人間は、死の包みを選んだのです。

という話によって代表される。此の型の神話においては、常に、原初不死であった人間が、甲乙二物質の孰れか一方を選択することになり、永遠の生命を象徴或は内包する物質とは逆のものを選択した結果、人間界にそれまでには無かった死という現象が始まるようになったと説明される。此の時、選択の対象となる物質は、例えばオーストラリアの東部にあるセレベス島中部ボソの原住民の間では、バナナと石であり、スマトラ島の西部に位置するニアス島原住民の間では、バナナと蟹、アフリカのベツイミサラカ族では、バナナと月、同じくタブワ族においては、例にあげたウエンバ族同様、それぞれ死と生の入った二つの籠という具合に、種々其の土地柄に応じた物になっているが、孰れの場合においても、人間は二者のうち前者を選び、不死の運命を放棄するか、若しくは死の運命を獲得することになっている。選択型の神

話を伝承するものとしては、前記の諸例の他に、アフリカのツンベ族、ンガラ族、ドゴン族、マサイ族を始めとするアフリカの諸種族があげられる。

対立型——此の型に属する死の起源説明神話は、ニュー・ジールランドの

マウイは、人間が永久に死なぬことを望み、ヒナ（月）に、「死を短かくしてくれ——人が死んでも甦り、永遠に生きさせてくれ」と言いました。するとヒナは、「仮令人間たちが溜息をつき、悲しんでも、死を非常に長くしてやろう」と答えました。マウイは、「人間を、お前さんのように死んでも甦らせてくれ」と再度言いましたが、ヒナは、「人間を死なせ、土にならせ、決して甦らせまい」と言い、そのようになりました。

という話によって代表され、多くの場合、永遠の生と死を各々代表する二個の神的存在の登場と、其の間における論争（此の論争が暗示的に表現されているにすぎない場合も間々ある）及び死の代表者、即ち人間界に死を導入しようとする者の勝利という主構成要素を有し、更に其処に種々の物語要素が付加されているのである。生及び死を代表し、人間の運命を其の掌中に握っている者は、多く人間以外の動物や超自然的存在態——其の組合せは、蟻と蜘蛛・月と鼠・蛙とカメレオン・ワタリガラスとミソサザイ・コヨーテと雲雀というように変化に富んでいる——であるが、時によつて論争の結果を直接蒙ることになる人間であることもある。また、二者の対立論争が、一方の他に対する報復として語ら

れる場合があり、アフリカにおける対立型の神話は、ほとんどみな此の報復の要素を備えている。

此の型の神話は、タヒチ島、バラオ諸島中のベリリウ島、アンブリム島、サモア諸島、フィジー諸島、南東オーストラリアのウオチョバルク族、カロリン諸島、マレー半島のメントラ族、シベリアのエニセイ河口に在住するエニセイ・オスチャク族、グリーン・ランドに在るエスキモー、北米大陸北西岸に在るハイダ族・同キノールト族、カリフォルニアに在るミオーク族、等々の島々及び諸種族で伝承されており、アフリカ大陸では、ブッシュマン族を始め、ダホメイ族・フオ族・バムム族・ムバラ族、其の他多くの種族間に伝えられていることが報告されている。

伝令型——此の型の死の起源説明神話は、二匹の使者型或は失敗した使者神話等の名で呼ばれるもので、特にアフリカ大陸に其の分布が顕著であり、もしアフリカ大陸に他の型の死の起源説明神話が存在していなければ、アフリカ型と言っても良いほどである。

アフリカ大陸における伝令型神話は、其の構成及び内容が、それぞれ極めて類似していること、死の起源を説明するのに、前掲の選択型や対立型の其れのように、単に相対立する概念としての生と死を持ち出してくるだけでなく、其処に今一つ越自然的存在態と人間との間を仲介する存在としての使者・伝令を登場させていること、などから考え、其の伝承地域或は種族毎に、他と全く無縁に創作されたものというより、或る一地域において創られたものが、漸次他の地域へと伝播され、各地で語り継がれる間に、

伝令として活躍する動物を変化させていったものと考えられる。

此の型の神話は、ズールー族の

創造主が人間を造った時、人間は死ぬべきか永久に生きるべきかという問題が起こった。そこで創造主は、御存知のように、動物のなかでも最も足の遅いカメレオンを、人間が永久に生きるべきだと告げさせるため派遣した。カメレオンが、まだ道の途中にいる時、神は心変りを起こし、足の速い蜥蜴に、人間は死ぬべきかというメッセージを持たせて派遣した。カメレオンは食事のために立ち止まり、蜥蜴が最初に到着した。

という話や、此れと全く逆の立場から使者が送り出されるコンデ族の

死が存在する以前、神に死を乞うべきであるか、乞わざるべきかで人間たちは争っていた。死を望む者たちが神のところへ羊を遣わし、逆のことを望む者たちが犬を遣わした。羊が最初に神のところに到着し、死を獲得した。

という話によって代表される。此の型の神話において、人間界の生・死を掌握している超自然的存在態と人間の間を仲介する動物は、極く少数の例を除いて、常に二匹が一组となって登場し、しかも前の対立型神話において生・死を主張する動物が様々であったのと同様、山羊・羊・犬・兎・蜥蜴・カメレオン・蛇・亀・蛙と種類が豊富であるが、中でもカメレオン——二・三の場合を除き、人間の不死・再生を伝えるための使者として登場する——と蜥蜴の組合せが顕著である。

伝令型の死の起源説明神話を伝承するアフリカの種族は、前に実例を引いたズールー族・コンデ族・ホッテントット族・ボンゴ族・トンガ族・ツワナ族・ンゴニ族・イボ族・イラ族・ニヤンジャ族・ヤオ族・ベンバ族・キクユ族・カンバ族等々であり、其の分布は、ほぼアフリカ全土に及んでいる。

物語中の主要な登場者として伝令の役を果たす動物が姿を見せる死の起源説明神話を称して、伝令型とするのならば、其の間に二者の伝播関係を実証するに足る伝承が、現在のところまだ発見されていないので、アフリカ大陸の神話群とは、まず無縁なものと考えざるを得ないのだが、ニュー・ブリテン島のガゼラ半島原住民の伝承、及び内容の類似や民族・文化の移動・伝播の事実から推して、其の間に何らかの關係があるものと想像される安南の伝承なども、此の型に属するものと考えて良いだろう。此のニュー・ブリテン島と安南の伝承は、其の孰れもが超自然的存在態から人間のところへ不死再生を伝えるべく派遣された伝令が、人間には死を、蛇には不死再生を与えたとしており、それぞれが細部に他とは異なる点を有しているものの、神から派遣された伝令が、多くのアフリカの神話の場合とは違い単数であること、其の伝令が神の意志とは逆のことを人間に伝えたこと、蛇の脱皮を不死再生と見做していること、等主な構成要素を一致させているので、内容の面で明らかに相關關係を有していると思われる。もし、此の両者が伝播關係にあることを証拠立てるに足る他の類似伝承が更に幾つか発見されるならば、伝令型死の起源説明神話は、アフリカ様式の其れと、アジア南東部様式の其れに二分する

ことが出来るよう。

処罰型——此の型の神話は、原初不死であった人間が、或る種の禁制を破り、或は罪を犯したり、超自然的存在態の忠告に従わなかったり、更には超自然的存在態の命令に答えるに不誠実であったりした結果、死ぬようになったとするものである。死を齎すにいたる原因には、神の殺害計画・労働禁止の無視などを始めとして、犬・猫の不注意・怠慢といったことなどまで挙げられているが、中でも、神話・伝説・昔話等において、常に現状破綻の原因となる禁制破りは、物語の性格上、此の型の神話でも顯著に見られ、人間は、眠るべきでないのに眠ったり、後戻りすべきでないのに後戻りした結果、死ぬようになったとされている。

此の要素を有する神話の中で注意すべきは、人間が禁断の樹の実を始め、神から其の飲食を禁じられた棕櫚酒・ヤマイモ・バナナを飲み食いした結果、死ぬようになったとする話が、アフリカ原住民の間にあり、其れが、エデンの園の禁断の樹の実を、アダムとエバが食したため、人間界に死が始まったとする旧約聖書中の話と酷似していることである。アフリカ神話の中の幾つかが、人間は蛇に唆されて其れを食したのだとしている（バングウェ族・バサリ族）に至っては、聖書の語る話と其れとの間に、何らかの關係を認めざるを得ない。恐らく此の類似は、両者が極めて古い時代に同一の起源から其の構成要素を得たか、アフリカ原住民の話の採集した者の意識的或は無意識的改變の孰れかに起因しているであろう。未開人の伝承採集の初期の段階では、其れに従事した者の多くが、商人・探險家・宣教師といった民族学・人類

学等の知識を持たぬ人たちであり、必然的に其の採集された伝承が、それぞれの採集者により意識的に或は全くの不注意から更改されることの多かった事実を考慮すると、此の場合の類似にも問題はあると思うが、聖書其のものが多くの民間伝承を吸収して成立していること、キリスト教の初期の分布地域と、当該アフリカ原住民の居住地の近接性を考えると、二者の間に何らかの根元的関わり合いがあるようにも思われる。今後の研究が待たれるところである。

また、アフリカ原住民の処罰型神話中には、ギリシア神話の所謂バンドラーの箱（壺）譚と類似するもののあることも、注目に値する。此れも恐らくは、伝播によるか採集者の仕業による類似であろう。アフリカにおける不幸の入れ物は、箱（ララ族）であり、包み（ランバ族・カオンデ族）であり、瓢箪（カオンデ族異伝）であり、内から出てきたものは、死・病・あらゆる種類の猛獣・危険な爬虫類とされている。

処罰型の神話は、南米北東部ギアナのアラワク族が伝える

昔、造物主は、自分の創造物である人間がどうしているか見ると、地上に降って来ました。しかし人間たちは邪悪だったので、神を殺そうとしたのです。そこで神は、人間たちから永遠の生命を剝奪し、蛇や蜥蜴・甲虫のように皮を脱いで甦る動物に与えました。^{註6}

という話を代表的な例として、フィジー諸島、中央オーストラリア原住民、ビスマーク諸島中のヴァトム島、アドミラルティ諸島、東交趾シナのバーナー族、上部ビルマのチングボウ族、北アメリ

カのチェロキー族、南米オリノコ河原住民タマナチア族、アフリカ大陸原住民コンゴ族・同マサイ族・同ナンディ族・同ルアンダ族・同ダラサ族・同ソング族等々の諸地域・諸種族の間に伝承されている。

代償型——此の型の神話は、原初不死であった人間が、或る物質・行為を獲得または知ることの代りに、死ぬことを余儀なくされるに至るというものである。此の型の神話について注目すべきことは、性行為の知識若しくは出産の代償として人間界に死が導入されたとする話の多いこと、また、火を手に入れることで死が始まったとする話のあることである。アフリカのカニオカ族は、充分に意を尽した表現であるとは言えないが、

マウエッセは、四人の男と四人の女を創りましたが、彼らは二つの村に住んでいました。最初彼らは、性交については何も知りませんでした。マウエッセが其れを彼らに教えまして、女の一人が子供を産みました。しかし其の子はすぐ死んでしまいました。ただ、神の葉が子供の死に反し、人間を救うことが出来たのです。^{註7}

という話を伝えている。他に、此れに類する話を伝えるものに、アフリカ原住民カヴィロンド族・同ダラサ族がある。

以上、人間の死の起源を説明する神話を、其の内容面・構成要素における共通性から、便宜上五つの型に分けてみたが、何度も述べたように、死の起源説明神話は、死という現象自体が、人間の生活上重大な意義をもつものであるだけに、各地各民族において種々に創作伝承されており、とても此れだけの項目で其の総て

を包容しきれないことは言うまでもない。此の五つの型のうちの二つ以上を複合させた内容を有するものまで含めるならば、此れらの型の孰れにも属さない神話は、現在までに記録されているものだけに限っても、かなりの量にのぼるのである。

*

*

此処で、諸外国における死の起源説明神話から、眼を我国における其れに転じてみよう。

私たちは、我国古代の人々が伝承保存していた死の起源説明神話の一を、記紀に載録されたニギノミコト・コノハナノサクヤヒメ・イワナガヒメの三者をめぐる話に見ることが出来る。今、紀の巻第二の記事（一書の第二）によって其の概要を記すと、次のようである。天上界から日向の穗日の高千穂の峯に降下した皇孫天津彦火瓊杵尊が、海浜で木花開耶姫に会い、此れを妻に望むと、其の父大山祇神は、姉の磐長姫を共に奉る。皇孫は、醜い姉を退け、器量の良い妹だけを妻とする。すると姉は、「仮使天孫、不_レ斥_レ妾而御者、生兒永_レ寿、有_ニ如磐石_一之常存。今既不_レ然、唯弟独見御。故其生兒、必如_ニ木花_一之、移落」と、或は「願見蒼生者、如_ニ木花_一之、俄遷転当衰去矣」と言い、此れが「世人短折之縁」となったという。記も此れとはほぼ同じ話を伝え、「是以至于今、天皇命等之御命不_レ長也」と結んでいる。

記紀の伝承は、其の編纂者が、或る種の編集方針の貫徹を他の何にもまして優先させ、種々の伝承を接合配列することに専念し、物語細部の構成に配慮を欠いたためか、原初の人間が不死であったことを明らかにしていないし、記の其れにいたっては、天

皇の命が短いことの説き明かしとして、人間一般とは無縁なものとなつてゐるが、記紀載録神話の多くがそうであるように、此れを根元的には、既に支配階級の頂点に立つた天皇及び其の祖先神とは全く關係のない物語、純粹に一般民衆の間で創作され、伝承されていた神話として考へるならば、其れらが、此れまでに見た諸外国の例と同様に、原初不死であつたはずの人間——死の起源説明神話においては、孰れの場合も、例外なく、原初の人間は不死であつたとされてゐるが、此れは、死の起こりを説く必要上、また、苦しみ多い現実社会に対する楽園的世界の存在を想像する未開人特有の思考産物として出来た世界的広がりをもつ觀念であると思われる——が、物語創作時に、死を余儀なくされてゐたことを、合理的に説明せんとしたものであることは間違いない。しかも、此の二つの伝承に登場するコノハナノサクヤヒメ・イワナガヒメの二者が、それぞれに人間の生命の脆弱・短少と恒久・永遠を象徵する存在であり、ニギノミコトが此の二者のうち前者を妻として、後者を顧みなかったことで、（人間界に）死が始まつたとされているので、選択の対象となるものが、純然たる物質ではなく、人間である点に違いはあるものの、其れを、木の花と岩石の二物質であつたものが人格化されたのであると考へるならば、此れらは、前述した選択型の死の起源説明神話に属するものであると考へて良いだろう。

選択型の神話については、既にアフリカ大陸南東部のローデシア北部に在住するウエンバ族の伝承する神話を例として挙げ、此れに類する話が、スマトラ島西部に位置するニアス島原住民、ア

フリカのベツイミサラカ族・同タブワ族等々の諸種族に伝承されていることを述べたのであるが、今、我國の神話中此れに属する話があるという事で、更に此の型の神話に注目して、世界各地の死の起源説明神話を眺めると、同類の神話が、フィリピン^{註9}のミンダナオ島の東部に位置するパラオ諸島住民^{註10}、セレベス島ボソ地方在住アルフル族^{註11}、台湾の沙羅族^{註12}、の間に見られ、多少の更改がなされたと思われるもの、或は対立型・伝令型との複合の形になっているが、甲乙二物質で生・死を象徵する点において、明らかに我國の其れと関連があるのではないかと思われる伝承が、ギリヤーク族^{註13}、北海道アイヌ族^{註14}、台湾大么族^{註15}、等に伝承されているのである。此れらの諸種族が語り継いできた死の起源説明神話と、我國のコノハナノサクヤヒメ・イワナガヒメ譚とに見られる内容上の類似について比較検討するならば、アフリカ大陸の原住民から採集された話は別としても、彼我の間に何らかの相關關係が存在したことを認めざるを得ないのであって、此れまでの研究でも既に、「ボソの土族の推原神話と問題のわが婚姻神話との形式上並びに内容上の類同が、人心作用の同様に因する単なるパラレルではなくて、前者が後者の源流であることを、われ等に示唆してゐるやうにも思はれる」^{註16}、或は、「コノハナノサクヤヒメ型神話の故郷は、その分布からみて恐らく東南アジアであろう」と、我國の其れが、他地域・他種族からの伝播によるものであるとされている。私も、我國のコノハナノサクヤヒメ・イワナガヒメ譚は、其れが如何なる人々によって何時頃我國に伝来されたかということについては、まだまだ研究の余地が大いに残されているとは思

うが、其の祖型が南方世界の孰れかの地に發生し、台湾を経由して北上、我國に伝播し、其の保存伝承者、或は文献採録者、更にはまた記紀編纂者たちの手を経ることで、今日私たちの眼にするようなものになまで成長變化した結果であると考えている。恐らく此の祖型は、今日までに報告された話を見ると、我國から更に北上し、アイヌ・ギリヤーク両族にも影響を及ぼしたに違いない。

ただ、甲乙二物質を生・死の象徵とする考え方の祖型が、我國に南方世界から伝播して来て、コノハナノサクヤヒメとイワナガヒメをそれぞれ死と生を代表する者と見做す形、特に人間の短命・脆弱を木の花と同一視する考えにまで變化し、民間伝承の一として、民衆の間に浸透定着するには、我國内に既に其れ以前から其の祖型を受け入れるだけの下地が出来上がっていたか、或は其の祖型の伝播と時を同じうして、其の下地となる考え方が我國内に伝播流入し来たったものと思われる。此の下地が民衆の間に存在したため、木の花を人間の死・脆弱の象徵とする神話構成要素が出来し、人々の間に充分に浸透し得たと考えられるのである。

それでは、其の下地とは一体何であつたのか。其れは、此の世に姿を現わした最初の人間が、何らかの形で或る植物と關係をもっていたという考えである。原初の人間は植物を利用して超自然的存在態の手で創られたか、或は植物より自然發生したとする考えが、他に人間の短命・脆弱・死を表現するに足る物質が数多く存在するにもかかわらず、特にコノハナノサクヤヒメをして其れを表現させる考えを産出または容認せしめたのではないかと思われる。我國古代人は、美の象徵・脆弱の代表として單に木の花を持

ち出したのではなく、やはり木の花を岩石と対立させた背後には、最初の人間の誕生が植物と関わっているという考えがあったに違いない。更に大胆に考えるならば、此の最初の人間誕生説と首尾相応するもの、一連のものとして、此処で考察の対象としている死の起源説明神話が創作されたのであって、ニギノミコト——当然此の主人公は、民衆の間で伝承されていた死の起源説明譚においては別の名前であったものが、記紀或は其の資料となった諸文献成立時に、皇室神話の中に編入される時点で、此の名前になったのである——は、コノハナノサクヤヒメを妻に娶るべく物語発生の当初から運命付けられていたのであって、彼女とイワナガヒメの美醜という対比は、後になって物語伝承の間乃至文献載録時に、ニギノミコトによる選択を合理化するため、或はコノハナノ名称から案出付加された要素であるかもしれない。

我國の神話を集大成した記紀、或は其の他の古文獻においては、最初の人間が如何にして出現したかという神話が、具体的には全く示されていない。しかし、此れが我國に全く欠けていたということは、諸外国の例から推してもまず考えられないことである。我國にも古く、人間の出現を説明する神話が存在したのだが、何らかの事情で、其れが文獻に載録されなかったか、記録されたにしても其の文獻が今日に伝わらなかったと考えた方が良いだろう。

我國の古文獻には、此の神話の存在と内容を窺わしめる幾つかの言葉が記されているのである。即ち、紀に載録されたコノハナノサクヤヒメ・イワナガヒメ譚に見られる「蒼生」(記では青人

草)の語^{註17}、記で妻を死なせたイザナキ神が、其の直接の因をなした火神に向かつて言う「子之一木」(紀では「一児」と記し、「このひとつぎ」と訓んでいる)の語、『日本書紀』上巻「聖德皇太子示異表」縁「第四」中に見える「人木墓」の語^{註18}が其れである。此れらの言葉から考え、我國には古く、最初の人間が超自然的存在態により植物を用いて創られたとする話、或は其れが植物から自然発生的に出現したとする話が存在していたものと考えられるのである。

従来、我國の人間誕生神話が如何なる内容のものであったかを考察した者がほとんどない中で、大林太良氏は、喜界島の伝承等を引合いに出して、「日本古典神話の原型においては、南西諸島のように人類が土から創造され、息を吹き込まれたモチーフの人類起源神話が元来その一部をなしていた蓋然性が高い」とされた^{註19}が、私は叙上の諸語を始めとして、我國の伝承に影響を及ぼし得る近隣諸國に、植物を最初の人間誕生と結びつけるものの多いことから、我國における人類起源譚では、植物が重要な働きをしたものと考ええる方が、より蓋然率が高いと思っている。

最初の人類が植物により誕生したとする考えと、選択型の死の起源説明神話が共存する中で、被選択物質が或る種の植物から木の花となり、後に其れが美の觀念を伴って人格化され、最終的にニギノミコトに纏わる話と結合され、天皇家の神話を根幹とする系譜神話の中に織り込まれたもの、其れが今日私たちの眼に示るコノハナノサクヤヒメ・イワナガヒメ譚であると考えられる。

我國の文献記載神話中には、いま一つ別の型に属する死の起源説明神話が記録されている。其れは、記紀の神話体系において、前述の選択型神話の記載に先んじて、イザナキ・イザナミ二神の論争という形をとって記されている。即ち、記紀の神話では、火神を産むことによつて死去した妻に会うため黄泉國を訪れたイザナキ神は、妻の変り果てた姿に恐れをなし、黄泉路を一散に逃げ還るのであるが、此の時後を追いかつたイザナミ神は、千引の石を間に、夫神に向かい「吾当縊殺汝所治國民日將千頭」(紀一書第六)と言う。するとイザナキ神は此れに對し、「吾則当産三日將千五百頭」(同)と反撃するのである。此の結果を記は、「一日必千人死、一日必千五百人生也」と表現している。

此の神話が真に死の起源を説明するものであるか否かについては問題があり、此れを死の起源説明神話であると見る者がある一方で、「人口の自然増加を解釈した成因説話である」^{註21}或は「人類増殖の原理を説明した、説明神話である」^{註22}と、全く別の面から解釈する者がある。確かに此の神話を記紀の神話体系中において眺める時、既に其の前部にイザナミ神の死が語られていることでもあり、死の起源説明神話とするより、人口の増加現象を説明したものと解する方が合理的である。しかし、神話其のものが發生の原初的段階にあつては断片的非系譜的存在であることに鑑み、此の話を其の前後の物語と切斷分離し、一個の獨立した話として見ると、其れは人間の死すべきことを主張する神と其れに反對する神の論争譚と見做すことも出来るのであつて、近隣諸國に見られる類話からも、其の本来の形体は死の起源説明神話のうちの對立

型に属する伝承であつたのではないかと考えられるのである。しかも、前に見たように對立型の死の起源説明神話が、オーストラリアを始めとして、多くの南洋の島々、東南アジア、更にはシベリア、北米大陸と広く分布しており、其の分布地域を考慮すると、我國の其れもやはり前述の選択型神話同様、孰れかの地から我國に伝播した對立型神話の変形であるという可能性が極めて高いのである。

伝播・民心同似作用の結果の孰れによるにしても、我國の此の神話は、本来イザナキ・イザナミの二神とは無縁な、生・死の代表者による論争の結果、人間界に死という現象が見られるようになったのであるとする形で、広く民衆の間に伝承されていたものであらう。其れが体系的神話の形成時に、イザナキ・イザナミ神を主人公とする神話中に編入され、今日に及んだのであり、此の死の起源説明神話の前部に、人間の死に先んじてイザナミ神の死が語られているという不合理・矛盾が、其の原初的形体を留めた断片的神話を、一個の体系の中に編入した事実を如実に示すものであると考えられる。更に言うならば、私たちは、此処で見た對立型の死の起源説明神話が、其の前部において展開されるイザナミ神の死亡譚とは、其の本来の形体において全く無縁の獨立した存在であつたことを、イザナミ神の死亡譚其のものに、對立型とは別の型の死の起源説明神話の存在を想定することで証明し得るかもしれないのである。

即ち、イザナミ神——此れが本来單なる人間であつて、神話成長の過程で神格化された存在であることは言うまでもない——は

記紀孰れにおいても、火神を出産したことが原因で死亡するのであるが、此処に私たちは、代償型の死の起源説明神話の片鱗を垣間見る心地がするのである。

代償型に属する死の起源説明神話の中で、火の獲得が直接の原因となつて人間界に死が始まつたとする話は、極めて少ないのであるが皆無という訳ではない。従つて、我國のイザナミ神の死亡譚をもつて、代償型の神話であるとすることは、近隣諸国に其の類例を見ることが出来ないので、早計に過ぎるが、一考の余地はあるものと考えられる。紀の一書第五に、イザナキ・イザナミ二神が鶴鶴から性行為を学んだとあり、諸々の国土神々を産んだ後、イザナミ神が死去することも、何となくイザナミ神の死亡譚が代償型に属する死の起源説明神話であることを示唆しているかのようである。

記紀二書に記載された神話が、古代人の創作伝承していた諸種雑多な断片的神話を取捨選択・変改結合した結果成立したものであつて、其の始めから今日私たちの眼にする如き整然とした体系を有するものでなかつたことは、神話が本来有している断片的・非系譜的性格によつても明白な事実であるが、其処に見た如く死の起源説明神話が二個——代償型神話の存在が確實になれば三個——までも採録されていることによつてもまた明らかである。即ち、系統・伝承者を異にしていたはずの死の起源説明神話が、首尾一貫、前後の矛盾なく系譜的に時間の経過を追つて語られていく、記紀載録神話に、二種以上採られていることに、私たちは此の両書及び其の成立に際し直接の資料となつた諸文献の持つ性格

を窺い知ることが出来るのである。

選択型・対立型神話の孰れもが、紀の載録状況を見ると、其の資料の一となつた文献の成立する時点で既に、ニギノミコトやイザナキ・イザナミ二神を主人公とする話に合流していたもののようであり、紀の編纂者は、此の二つの資料をそれぞれ忠実に「一書曰」の形で本文に添付しているのであつて、其処に此の二種の死の起源説明神話を所謂系譜型神話の体系に含め、関連あるものとする意図は全く見られないのであるが、記の編纂者は、此の二者を完全に系譜型神話に編入・一体化している——紀で対立型神話を語る一書の第六の内容は、其の前後の物語まで含めて、記の当該部分と良く似ているが、選択型を語る一書の第二はさほどではない。従つて、紀の前の一書と後の一書が、一本の書物として存在していたとは考えられない——上に、紀の一書が、「顕見蒼生者、如木花之、俄遷転当衰去矣」としている部分を、「天皇命等之御命不長也」と、物語が神代から人代に移行する寸前において意識的に変改している。此処に私たちは、記の成立に際して為されたに違いない意図的変改の数々を思いみるべきである。

*

*

我國の古文獻に載録された死の起源説明神話には、見た如く選択型と対立型の二種があり、更に代償型の其れが存在していたのではないかと思われる節が記紀の表記に見られたのであるが、此処にいま一つ我國には別の型の死の起源説明神話が存在していたのではないかと思わせる伝承が見られ、此の型の神話の我國にお

ける存在の可能性は、前記の代償型の其れよりも高いと考えられるのである。次に此の型の神話について少しく考えてみることにしよう。

大正十五年八月、ニコライ・ネフスキーが宮古島出身の人物から聴取し、「月と不死(二)」の題名で雑誌『民族』第三巻四号に掲載した「月のアカリヤザガマの話」は、月神・太陽神が、人間の祖先に永遠の生命を与えるべく使者アカリヤザガマを派遣するが、其の怠慢故に蛇が不死となり、使者は罰せられたとするものであるが、此の話は前に見た伝令型の死の起源説明神話に属するものであり、内容的に見て、前にコノハナノサクヤヒメ・イワナガヒメ譚について述べた際に触れた北海道日高国沙流郡のアイヌが伝える話と同工異曲のものである。此の宮古島の伝承が何時頃から同島に存在した話なのか問題であるが、極めて古い時代にまで其の存在を辿り得るとすれば、アイヌにも同型の神話が見られることでもあり、我国本土にも伝令型神話が流布していた可能性^{注24}があることになる。

ネフスキーは、前掲の論文において、宮古島の伝承とアフリカのホッテントット族の伝令型神話との類似を指摘したに留まったのであるが、ニュー・ブリテン島や安南・宮古島の伝承を並べてみると、人間に永遠の生命を与えるべく神から派遣される使いは単数であり、しかも使者が其の生命を蛇に与えてしまうという二点では完全に一致している——アイヌの伝承だけは、伝令が雀と類であり、蛇も登場しない——ので、此れらの間に伝播関係があり、我国本土にも伝令型神話が古く存在していたものの、何らか

の事情で記紀或は其の資料文献に載録されなかったという可能性はあり得ることである。

もし伝令型の神話が我国本土にも存在していたとなると、当然我国には系統・伝承者を異にする多くの死の起源説明神話が伝承されていたことになる。そして我国の死の起源説明神話の場合、近隣諸国や諸民族の神話とは無関係に、独自に創られたというよりは、我国の地理上の位置や海流或はまた文化の伝播・民族の移動等の面から推して、神話構成要素が他地域から伝播し来たった後、国内で成長変化し、民衆の間に漸次定着していったのであると考えられ、文字の渡来と共に其のあるものは文献に載録され、あるものは記録されることなく、更に語り継ぐという形で保存され、文書に記録されたものも、其のあるものは記紀の所謂系譜型神話の構成に利用されて今日に伝えられ、他は其の保存を有力氏族によって保証される如き書物に編入されることなく、時の推移と共に逐次忘れられていったものと思われる。

注1 フレーザーは、死の起源説明神話を、(1)二人の使者型、(2)月の満ち欠け型、(3)蛇の脱殻型、(4)バナナ型、の四類に分かっている。——J. G. Frazer, *The Belief in Immortality*, vol. 1, p. 60.

- 2 Frazer, op. cit., p. 77.
- 3 R. B. Dixon, *Oceanic Mythology*, p. 54.
- 4 Hans Abrahamson, *The Origin of Death*, p. 27.
- 5 Abrahamson, op. cit., p. 21.

- 6 Frazer, op. cit., p. 70.
- 7 Abrahamson, op. cit., p. 71.
- 8 此の伝承が、本来ニニギノミコトを中心とする神話圏に属するものでなく、一個の民間説話であったことは、既に津田左右吉博士（『神代史の新しい研究』——『津田左右吉全集別巻第一』三八頁）や松村武雄博士（『日本神話の研究』第三卷六一〇—六一三頁）によって明らかにされている。
- 9 土方久功著『バラオの神話伝説』六四—六五頁。
- 10 Frazer, op. cit., pp. 72-73.
- 11 臨時台湾旧慣調査会第一部『蕃族調査報告書』——沙撈越——八一頁。
- 12 服部健著『ギリヤーク族の世界起源』——『現代のエスプリ』第二二号一四一頁。
- 13 金田一京助著『アイヌの研究』二〇八—二〇九頁。知里真志保著『アイヌの文学』——『岩波講座 日本文学史』第一六卷四頁。
- 14 臨時台湾旧慣調査会第一部 前掲書——大ム族——一七頁。
- 15 松村武雄著前掲書六二〇頁。
- 16 大林太良著『日本神話の起源』二二九頁。
- 17 宜長以来諸家此の語を、人間が草の繁茂する如く増加する故につけたものと解しているが、此れは前後の物語を人口増加現象説明譚と見做し、其の説明譚の内容と此の語が密接な結びつきをもつと考えた上での解釈である。
- 18 従来此の語は、紀の表記との関連で「一人」の意と解されていたが、何故「一人」を「一木」としているかについては明解がなかった。最近、日本古典文学大系 67・68『日本書紀』が、言語学的な立場から、雄略紀十三年条に「馬八匹」の意で「宇摩能耶都擬」とあるのを根拠として、「一木」を「一匹」の意と解した（上巻五五六頁、下巻五四五頁）。しかし、如何に愛する妻の死の原因となったからといって、我子を「一匹」と数えるか疑わしい。
- 19 此の語については、「八木墓」とする本もあり明解がない。日本古典文学大系 70『日本霊異記』が、物語の前後の内容から「木と化した人の墓の意であろうか」と新解を出したが、猶、「存疑」としている。
- 20 大林太良著『記紀の神話と南西諸島の伝承』——日本文学研究資料刊行会編『日本神話』四一頁。
- 21 西村真次著『記紀の人類学的諸問題』——『早稲田文学』第二六三号一〇二頁。
- 22 次田潤著『古事記新講』六六頁。
- 23 N・ネフスキー著・岡正雄編『月と不死』（東洋文庫版）一一—一五頁。
- 24 西南諸島と我国本土の伝承に著しい類似が認められ、其の間に多く伝播関係の成立することは、宇宙世界起源説明神話の例ひとつを見ても明らかである。拙稿「記紀載録神話の冒頭部について」——『文芸と批評』第三卷第八号一〇—一一頁参看。